3R教育のすすめとその比較史的考察

―― 知識教育論序説 ――

池　田　　進

I　3R教育のすすめ

かって貝原益軒が和俗童子訓の中で，「農工商の子には，いとけなき時より，只物かき算数をのみをしへて，其家業を専にしらしむべし。必楽府淫楽，其外いたずらなる無用の雑芸をしらしむべからず。これにふけり，おぼれて，家業をつとめずして，財をうしなひ，家を亡せしもの，世にためし多し」（明治44年版益軒全集巻之3，192頁）と庶民教育の基本を示し，更に富人の子は，「立居ふるまひ，飲食の礼などをばならふべし。必いましめて，無頼放逸にして，酒色淫楽をこのむ悪友に，まじはらしむべからず。是にまじはれば，必身の行あしく，不孝になり，財をうしなひ，家をやぶる。甚おそるべし」（同頁）といましめたが，読み・書き・そろばんの基礎をふまえた，庶民教育の発想である。江戸時代さえかくあるに，大衆の時代の今日3R教育を軽視するは奇異なことといわざるを得ない。幼き子供がはじめて読み・書き・そろばん即ち算数の世界に導入される時の張りきり方は世の常の親ならば誰しも気付くことであろう。遊びに興がるときの顔よりも，はじめて字が書けた，本が読めた，数が数えられたときのよろこびの顔の晴れ晴れしさは最高のものである。この機をつかんでぐんぐんと知識の世界へ導入してゆくことこそ教うるものの醍醐味でなければならないのに，経験学習の仮説にとらわれて，3Rの導入と完成を，教育の周辺に追い放って少しも異としない。それどころか，3Rを教育課程から追放して得意になっているのである。

ただ読めたらいい，書けたらいい，数えられたらいいというものではない。正しく，早く，美しく，読み書き数えられることは，生活にふみいる前に，反復練習されて子供の心の中に整備確立されていなければならないものである。この基盤に立って自由自在の知識の操縦が可能となってくるのだ。このこと自体が人間の生活なのだ。心の中に知識の泉を持ったものには，内にひそむ豊かな創造的自由がかくされている。が，内面に知識の動力をもたないと，いかに外面は派手に活気あるように見えても実際は単調である。今日一部に公立学校教育の偏知的劃一主義を批判し，創造的自由を私立学校教育に求め，私学の世界に人間の自由創造を実験せよと叫ぶ人があるが，少しピントが外れた見方のようである。また私学の長所をその創設者の個性に求める傾きもあるが，こうした貴族的な教育の捉え方自体がすでに近代性を喪失して了っているのだ。時差登校させねば朝の整理が出来ないほどなマンモス高校，学生が全部忠実に出て来たら入れきれない大学，こんな調子でどこに私学の独創と自由があるのだろう。あるのは尨大な劃一だけではない

か。国家の統制下にある国立大学，任命制教育委員会の管轄下にある公立学校だけが，劃一的であり，入学試験準備一辺倒であり，ひからびているのではない。

教育の内容をひからびさしているのは，マルチョイ式の客観テストを権威的なものとする考査方法，教育の内容よりは方法の新奇さを求むる教育哲学，書き易い字を並べさえしたら知識内容が豊富になると思う哀れな国語政策，出来るものと出来ないものとを区別出来ない教育の仕方，いつまでも人間を乳児扱いにする新教育，6・3・3・4制の単軌制学校体系崇拝，などであり，これが今日の日本の教育を内容貧困に導いているのだ。住民の直接選挙による公選制教育委員会にしたら，教員組合に学校を管理させたら，教育を個人経営にしたら，学校教育の生命は直ちに息をふきかえすのだと簡単にいいきれるものかどうか。教育に年季をいれたものなら少しは教育の道理も判るだろう。

素手の国民大衆を真に強大ならしむるものは知識という名の武器である。知識の武器を持たざる人間はまことに無力な存在である。人工衛星が人間をのせてとにかく地球をかけめぐる時代には馬鹿は通用しない。知恵をつくってこその人間形成である。単純な頭のままに放置しておいて人間が良くなり，社会が発展するのならば，世界歴史の舞台に栄枯盛衰のひしめきはなかったろう。も少し日本の国民が賢くなっていたら，政治も教育も無力なものにはならなかったに相違ないし，知性に裏づけされた勇気が，世間知らずの公爵や大将に祖国の運命を託するようなことを許さなかったろう。知性の逞しいものの強さを，今次世界大戦の只中のヒットラー占領下の国々の民衆のレジスタンスの中に，まざまざと私たちは知らされた。カトリック者が果敢に抵抗したのも，古典教育を受けた知識者の中に反ナチ体制の闘士が多かったのも，要は彼等の知性のたしかさが然らしめたのである。かっては最高の指導者と崇めしひとを，落ち目になったからとて逆さ吊りして喜ぶ民衆のすがたのどこに進歩の姿が見られよう。余りにも無知な下劣な感情があるだけではないか。

巻物一軸取り出して声高らかによめば人間形成が立ちどころに出来るかのような錯覚は，余りにも知性の貧困な風景ではないだろうか。自己の劣勢を攻撃行動に転化することと，正しい知力に培う訓練行動と，どちらが人間の進歩に役立ち得るか。劣等感情のはねかえりを進歩の行動と誤認することほどおろかなことはあるまい。

良き政治意志の育成はもとより有力な教育目標のひとつであるが，これは知恵熟せざる間に政治的ドグマをつめこまれて成育されるものでは決してない。過去の日本の修身教育や愛国教育が結局失敗に終ったのも未熟な頭に幼稚な政治意識をおしこんだからに外ならない。これを知育偏重や欧米思想崇拝の故にするのは思わざるも甚しきものである。今日進歩的と称する側に於てすら，何よりも先きに知力をねることを無視して，真っ先に政治教育や拙劣な洗脳教育を得々となす傾きのあるのは，日本の次代の世代のことを想うとき，淋しき限りである。保守側亦依然として戦前の幼稚な愛国洗脳教育を夢みるとすれば，保守自ら進歩陣営の軍門に降るの止むなきに至る日も遠くはあるまい。

教育のはじめに置かるべきものは知識の基礎である。この簡単なことが，実用主義的であろうとすることの故に忘れられてきた。読み・書き・そろばんは陳腐なことと軽視され，知識の基礎訓練はいつしか学校から消えさり，お好みの品々をわんさ並べるスーパーマーケットみたいな安手のものに学校はなり下って了った。そこで，新しい経験の世界に入る前に，基礎的知識訓練教科の改善強化された訓練のために，学校はその全資源を活用せよとの要求が当然にアメリカでも生じ，一般識者から先づするどく改革意見が出たのであるが，教育関係者たちは，プラグマチズム神話に酔ってか，生活適応や消費教育優先の夢さめず，文化的停滞におちいっていた。この事情は日本とても全く同じである。

教育学の立場がどう指示しようと，一定の知的教科は，学校カリキュラムに於ては基本的なものである。知的なものこそ現代生活の基礎である。読み・書き・そろばんは小学校の不可欠な基礎学習である。３Ｒの能力なしには知的生活はあり得ないからである。学校は，科学や知識の訓練の場である。これをプロ野球に例えてみよう。いづれの選手も血のにじみ出るような投捕球訓練からたたき上げられたのであり，試合直前はいつも投捕球運動からはじまるのであるが，いきなり生活経験学習という漠然学習からはじめるのは，本塁打王たらんとして，有名な打者の打席での構えだけを真似するようなものである。本塁打王の王座に上るのも，本塁打とは全く似つかぬ，捕球という基礎訓練を底辺として構築された訓練体系の克服の結果なのである。教育にもこれと全く同じ事情がある。読み・書き・そろばんという基礎からはじめて，ノーベル賞をもらえる学者にもなれるのだ。基礎知識訓練を何とかケチつけることは，つける人の自由だが，些か教育を解せぬ，はしたない行為である。基礎知識訓練の正しいことに自信をもち，教育に当る者はその授業内容の質的向上に努力すべきである。実質的な内容の勉強を家庭の助力をからずともいいように万全の工夫がなさるべきであろう。学習環境を家庭に構成し得ない社会的事情にある子供もいる筈であるから，そうした子供たちが知性の向上に於て，充分な家庭学習環境をもった子供たちに劣らないような学習指導効果を挙げ得るよう，充分学校で指導すべきである。それには家庭の学習環境が豊かでなければ学習効果が挙がらないような今日の教科内容の設定が充分に反省さるべきであることは勿論である。学力テストの結果などで成績の地域的格差があらわれているが，生れながらの子供自体は都会の子も山奥の子も均しい条件の筈である。後天的条件の貧富による格差の出現はのぞましいことではないから，教育行政などの適正なる措置により教育効果の全国的均等化の実現を図るべきであろう。誰れの責任かを問う前に，先ず今日の教育哲学が正しいか否かをよく吟味すべきである。地域社会の実状や要求に優先さすような教育哲学は何よりも先に一掃さるべきであろう。物的条件に左右されざるものを中核とする教育体系の下に，生活環境にかかわることのない真実の世界に於て，日本の子供たちを勝負させるような教育条件の設定が真剣に考慮さるべきであろう。でなければ，小都市町村の鉱業地域，漁業地域，農業地域，山村地域に生れたものは，大中都市の住宅地域，商業地域，商工業地域，工鉱業地域に生れたものより生涯劣るような結果を生ずることになり，国家の発展に重大支障を来すことになろう。文

部省の学力テストが悪いから地域格差が出るのだと反論もされようが，独善的な民主主義的オナニーにふけることなく，事態を正視して批判分析をなすべきが肝要と思われる。

かつては山奥の分教場で教育された人が学界の第一線に躍り出たことがよくあった。その人のたしかな知力が悪条件を克服してよく他を圧し得たのである。無理して中学時代の頃から子供を都会に送る苦労をしなくても，知力の訓練よろしきを得れば田舎にいても，高校，大学へと能力に応じて合格し得る能力を得ることが出来たのである。生活学習や経験学習に重点を置いていると，万事は都会中心の恵まれた条件に支配されてゆくものだ。そして良い条件が能力以上にひとを偽装するようになる。若いものが公平に実力を競い得るのは知識の場に於てである。競争はいかなる社会にも存在する。これを否定するのはひとを無能に追い込むことでしかない。自己の能力を客観的に直視するの勇気なきものの言い分によって，教育の内容や秩序が構成さるべきではない。自己の欠点を冷然とみつめて明日への勝利の反省とする勇気を与えることはまた，道徳教育のひとつの目標となるかも知れない。能力差別主義は個人競争の行きすぎを伴い，特に秀才グループ間に，ひとをだまし蹴おとして，おのれひとりを得(トク)せしめようとする劣悪な競争思識を伴いがちだという非難があるが，これは何も能力主義自体がもたらしたものでなく，親たちの，特にママ族たちの虚栄心が子供をひっぱるからである。ことにいけないのは利己的な親ごころというものであろう。あばたもえくぼとか，とかく愛する者への私情は欠点を見つめる力をうばいとり，ひとを見境なくするもののようである。親たちのもつ社会的威信を子供に世襲せしめようとすることほど愚かなことはない。親たちが何と考えようと，賢い子供は賢いし，愚かなものは愚かである。

このごろの問題となっている受験期の子供の利己的競争心はそう余り案ぜずとも自然と陶汰されるものだ。他のものに教えてやりもせず，助けてもやらないような利己的な子供は，自然と他から嫌われるようになるが，これはその子供に対する社会的制裁のあらわれである。何かの都合で実力のないものがのし上ることがあるとしても，やがては蹴おとされるものである。能力差別主義の故に利己的な子供を出すまいとして，無差別主義におちいり，出来る子供と出来ない子供とを区別出来ない教育をして，多数の子供を凡庸低劣化して了うことの方が影響は大に憂うべきこととなる。或程度の競争心は起って当然のことである。問題は実力あるものが正しく公平に勝てるようにすることである。親の威光によって子供の実力を偽装するは愚の骨頂である。親たちへの気兼ねから子供の実力の差別をすることを遠慮する教師があるとしたら，これ亦間違っている。が教育の地方統制主義はアメリカの例にみられる如く，親たちの教師への圧迫を伴いがちである。いわれなき外からの圧迫をしりぞけるためにも学校はある程度抽象された理想の場所であることを要する。学校教育が子供たちに期待する社会像は少なくとも数十年先の社会のこと，大人たちの利害の交錯した目前の社会では決してない。学校が地域社会と密着することが決して絶対的鉄則であってはならない。学校自体が理想に燃ゆる社会であればそれでいいのである。何から理想は出るか。3Rを自在にあやつる知力なくしては理想は出ない。単なるおしゃべり討論か

らは思いつき程度のものしか出まい。ねばり強い知力の設計によって理想ははじめて可能となる。そこでこの知力を幼い時から練ることが絶対的といっていい学校の任務である。知力は意志力を伴い，体力への期待を強くする。頭でっかちなどと称して知力を軽視すれば，期待される意力も徳力も体力も影をひそめざるを得ないであろう。

今は昔，昭和二十六年に出された学習指導要領には，学校は，読むこと，書くこと，話すこと，聞くこと，観察すること，数えること，計算すること，物をつくること，問題を分析すること，推理することなどの技能を学習する機会を用意すべきであり，これらの技能は，それを用いる必要のある情況に当面した場合に，最もよく習得されるものであるから，それを用いる必要のある情況をこどもに提供することがたいせつである，とあるが，この「用いる必要のある情況」というような機会性が，戦後の日本の教育から基礎訓練性をうばうことになったのである。すべての児童生徒がこれらの技能を用いることを必要としているのであるから，絶対条件としてその基礎訓練性を強調していいのではないだろうか。時にのぞみ，情況を利用するような学習は，家庭教育でやれる仕事である。学校はそれ以上のものが必要であるからつくられたのである。だからはじめから，何人も水準以上に獲得すべき基準として諸技能が訓練されねばならない。更に改めて児童生徒の必要によって再調整することは絶対に必要なのではない。必要を無視することはいいことではないが，目先きの必要にしばられて将来のためになさねばならないことを犠牲にする要はさらさらないのである。

人間の知識の発達は３Ｒを底辺とすることのみに於て可能なのである。このことは教育に関心を持つものの忘れてはならないことである。３Ｒというと，鼻先きでふーんと笑う傲慢さが，教育の実体を喪失せしむるに至った原因である。３Ｒの基礎が不完全だと，その子供たちは生涯知識生活に事欠くことになろう。しかも３Ｒは凡ての子供たちが或程度まで平等に上達出来るものである。教育の機会均等とは能力発達の機会均等でもなければならない。

この頃，家庭教育の問題が改めて喧しく取り上げられているが，これは，幼児教育と関連して家庭教育がその重要性を認識され出してきたことと，学校との関係に於ける家庭の教育機能の役割の再吟味とが，家庭教育を大きく写し出したことによる。家庭教育を振興するために，婦人の団体活動や学級活動やグループ活動の中に，家庭教育についての学習を計劃していれることを文部省もすすめるまでに，家庭教育のことが計劃化されはじめている。しかし私がここに家庭教育を問題にするのは，家庭教育全般につき論ずるためではない。最近家庭教育に基礎知識教育の主役をさせようとする傾向があるやに見受けられるので，学校教育と家庭教育の役割をとりちがえることによる，教育の結果の不毛を招来しないように，また，知識教育の主権を学校が家庭にうばわれないようにとの老婆心から，敢てここにとり上げたのである。従って子供のいろいろな教科の知識を強くする角度から細かく家庭教育を論じようとするものでもない。

もともと家庭は私的な凡てのものの源泉である。故に公的な人間形成の場としては最もふさわしくない場所のひとつである。その代りに，温い，情愛に充ちた，所謂人間味に溢れた人間関係

の基礎形成の場としては恰好の場所である。家庭教育の本命は，後者の場に求むべきであるから，この節で論ずることは家庭教育としてはむしろ非本来的なことに属するかも知れない。学校がその本来の使命に邁進しないから，家庭教育が知識学習に重要な役割を果すべく要請するという，本末顚倒現象は一日も早く解消さるべきであろう。人間の客観的行動の基盤に家庭的な雰囲気はむしろ不要である。仕事への献身は家庭的温情主義からは出てこない。家庭的温情主義は下手をすれば仕事のごまかしとすらなることがある。教育のことに関して学校と家庭とがそれぞれの役割を取り違えないことが必要であろう。学校教育がどうも赤だから，家庭教育で大に保守教育をしてやろうなどととんでもないことを考えている向きがもしあるとしたら，これ亦的をはずれたことである。が家庭の非合理的情緒主義は，保守的に充分悪用される恐れは十分にある。学校で子供たちに充分な知的開眼を施して，自分の家庭を批判的に見得るようしなければならない。これを忘れると，家庭教育はむしろ悪用される公算が大きくなる。度し難い利己主義に，家庭内の人間形成が方向づけられる危険があるからである。特に特権的地位にある親の場合は，その特権を子供にも世襲させようとして，親たちの利己的苦闘がはじまるのであるが，犠牲になる子供こそ哀れなものである。学校における非情な能力別適性教育が心要となる所以である。また古来，理想主義者たちが，子供の教育に親が介入することを不可としたのも，親の利己主義が子を誤まるとしたからである。いわれなき親の要求をはねかえす知恵の鋭どさを子供たちに培うことは，学校教育が主導せねばならぬことである。

数年前，H県立A高校の卒業式に卒業生代表がドライな答辞を読んで物議をかもしたが，これを，生徒の主観と学校を支配する客観との相剋の表われと解釈して読むと甚だ興味を感ずる。個々の主観の思うままにならない，学校のもつ客観的な性格が，この生徒には，「教師をしばりつけ　バラバラにし　事なかれ主義にし　教育の内容をゆがめ　ウソをデッチ上げ　教育を支配の手段にしようとねらっているやつら　おれたちが　無気力に　バラバラになっていくのを　ほくそえんで見ていたやつら」（答辞の本文は時事通信内外教育版一五四七号にのせられたものによる）と，反動勢力として映ずる。これと逆に，今日の若いものが思うままにならぬと嘆く大人の保守グループには，学校の客観性が，赤い勢力の魔手と見えるのである。家庭と異なる，学校の客観性を，それぞれの立場の色眼鏡を通して見るからである。いずれにせよ，学校はある客観的なものに支配されているところであることは事実である。

「〝いっさいを受験！〟　教師も生徒も父兄も暗黙の了解をしていた〝いっさいを受験へ〟そして言ってしまってからあわててつけ加えた〝いっさいを進学と就職へ〟怒りを　喜びを　悲しみを　憎しみを　いっさい失った人間の群れ　いっさい失わせようとする　黒い姿　いっさいを奪われた　いくつかの人形の前には　受験問題集と重要事項一覧と　受験対策日程表と　全国大学一覧と　それらが空間を独占していた」とのことばは，いかに普通高校の教育が大学進学という客観情勢のつよい力によって影響されるかを示して余りあるものといえよう。これを一部の良識派といわれる人は，知識教育の偏重の故とみるが，これ亦知識教育にエン罪をおしつけるもの

である。過渡的な準備段階の学校である以上，進学競争も止むを得まい。親たちがあれこれとけしかけなければ事はもっと平穏にすむ筈である。

このＡ高校が価値ある教育をしていたかどうか，この代表の答辞が妥当なものかどうかは，ここでは問題としまい。ただ，学校というところが，個人の意志や主観的なものではどうにも出来ないものであることを指摘するにとどめよう。この答辞も結局，苛烈な現実への，衒う反抗とみることが出来る。いろいろと所謂道徳的尺度を以て論ずれば，問題はあろうが，しらじらしい，勿体ぶった感謝の辞よりは好感がもてることも否定出来ない。これだから今の若いものは困ると云うひとがあるかも知れないが，それほど腹を立てる必要もない。笑って聞き流せばそれでいいのだ。

いかに家風に子供を躾けるか，家庭状況特有の人間関係である共感的交渉の中に自然にいかに人間形成がなされるか，家庭に於ていかに学校教育を補充するか，社会運動や政治運動の一細胞として家庭はいかにあるべきかなど，家庭の教育的利用についてはいろいろ考えられるが，ここでは子供の知的生活に対し家庭はいかなる役割をもつかに論点を絞って考えてみたい。従って家庭教育の他の，むしろ本質的に重要な面には関連する限りに於てふれることにする。

ひとは誰しも自分の子どもに対しては，その能力に於て人に優れかしと願う。ここで希望と現実を混同して，自分の子どもの能力の過大評価におちいると，悲しい喜劇が演ぜられることになる。幼稚園時代からの入試地獄は制度の罪か，親の罪かと考えると，私には親の罪が多いように思われてならない。大都市のひとつの傾向として，有名校に入れるルートをふくむ地域は地価が坪当り２万円内至１万円も他の土地の地価よりも高いといわれるが，これ亦親の罪といえるだろう。教育学や心理学は正しいことをのべているとしても，それを受けとる側で，それらの理論を公式として使えば，万事はうまく行くものだと信じこむようになるとこれ亦困ったことになる。「我が子よ賢かれ」との念願が，現実を上廻ってものごとが混乱するのだが，家庭教育は先づこうした愚劣な混乱をひき起さないよう，親達の心を正さなければならないであろう。子に対する心構えにつき，正さるべきものが多いのは案外に所謂知識ある親たちの家庭であるのも皮肉なことだ。有名な大学をねらい，その大学への最短距離だと考えて，その附属の幼稚園や小学校に子供をいれようと血眼になる親たち，賢くしてもらおうと思って教員養成大学などの附属学校へ子供を入学させようとするひとたち，こうした親たちが子供らに知能テストの練習をさせることなど凡て愚かしき限りである。知能指数や偏差値がどうのこうのということは少なくとも家庭の茶の間で流行さすべき言葉ではなかろう。

家庭は子供にとって勉強の場であるにしても，それは学校の教室のようなものではない。勉強部屋と教室とはその性格に於て根本的に違う。家庭でこそ文字通りの自発学習が行われるべきを原則とする。家庭に於ける知識学習は親が子供の教師の役割をすることを決して必要としない。親としては子供たちが学習の動機をもつような雰囲気をつくるだけでいい。読むべき適当な書物，表現への意欲，環境及び生活の合理的構成，これらが整備されることが先づ第一の条件である。

そうした雰囲気の中で子供たちが読み・書き・そろばんをくりかえすよう彼らを習慣づけたらいいのである。そのためには人間生活に於て知識生活は本質的なものであること，決して道具的なものではないことを充分に大人たち自身が弁えていなければならない。知識のための知識は，幼児や子供には必要でないかも知れないが，大人の世界にはこれは必要であるのみならず，実際に存在しているものなのである。或程度以上の知識の必要のない下級の職業には，知識のための知識はいらぬかも知れないが，知識の伝達生産を職とするものには知識のための知識は厳存する。知識の伝達と生産を自分の職業とする人たちの中に，生活の役に立つだけの低俗な次元の知識の性格をそのまま知識自体の性格と誤認して，知識のための知識はないなどとうそぶいている人をみると，一体その人たちは何で日頃自分の頭の中味としているのだろうかと疑いたくなる。知識のための知識があったればこそ，あらゆる高度の学問が発達したのであるし，かつ役に立つ知識も生れ出たのである。

「生活のため」，「生活に役立つ」とかいうものは，それが教育の次元で論ぜられるときは，学習指導の方便としてである。子供の生活と大人のそれとは性格と内容に於て異なるとするは現代心理学のいろはであるが，一体，「生活に役立つ」とか「生活のため」とかいう場合の生活とは何を指すのか。大人の生活か，子供たちのつくり出した生活をいうのか。重要なこの点がはっきりしないままに，従来生活学習とか生活指導とかいわれているのである。しかもいけないことは，生活中心と称することによって，抽象的概念的なものを低次におとし，知識を軽侮する風潮をはびこらすことである。難しいことはやらなくていい，感覚的に面白いことを追えばいいというような考え方を首位にもってくる行動習慣がつくられるとすれば，これは人間の発達にとって重大な支障を来すものだ。アメリカは一時この危機におちいった。従ってアメリカを模倣した日本もこの危険，即ち，頭脳の貧困化という危険におちいろうとしたが人間は本来理性的存在であるから，アメリカのひとたちも，日本の私たちも，数年前からこの危機を克服しようと努力を重ね，事態は好ましい方向に向っているようであるが，まだまだ学校現場や家庭などで，子供たちに難しいことを考えさせたり，やらせたりしてはならないということを，新しいことと思っているようである。子供は好きなようにさせておく方が教育的だとして，大人たちが子供への責任遂行の回避のいいわけとしている節が今なお見受けられるのはちと看過出来ぬことである。知識学習を軽視すれば教師は余り勉強しなくてもすむし，子供を放任しておくのがよいという考え方はこれ亦親の無責任行動の合理化となる。要するに知識軽侮は人間を怠けものにする絶好の餌である。

学校教育の場に於て基礎知識教育をする場合は反復練習が絶対不可欠の事であるが，家庭にありては教室に於けるような反復練習の形はとらない代りに，幼児は幼児なりに，児童は児童らしく，家庭の場に於て，遊びを通し，お勉強の形を通して，自分でくり返し同じことをして何事も学びとるし，受験生時代ともなれば，凄いまでに反復練習する。一部の人たちには，これが古くさい勉強の形式と考えられ，そののぞましからざることを強調するが，これは何かの都合で珍奇

なことのみを狙って新しがる心理のあらわれにすぎない。コツコツとくりかえし勉強する，これは知識形成には尊いことだ。そしてこのことが何ものにも優る道徳教育ともなる。注意すべきは親が自分の希望を子供に託して子供の能力以上のことを要求することである。子供が必要と認めて勉強していたら，たとえそれが試験のためであっても，そのまま放任していい。親としては健康管理だけすればいいのだ。仕事が苦しいのは当然のことである。教育を受けている子供たちにとって勉強は唯一の仕事である。家庭の中に，ティーチング・マシンやプログラム学習をまねたものをもちこむにしても，それはステレオを聴いたり，テレビを見たりするのとはわけがちがう。仕事に苦痛や退屈はつきものであり，それを抑止するのは健康の都合だけである。子供というものは何事にも疲れを知らぬものであるだけに，親としては信号の役割が重要となる。読みたいだけ読ませ，書きたいだけ書かせ，計算したいだけ計算させ，頃を見計って注意したらいいのであって，よみ・かき・そろばんをやらせたら，立身出世主義になりはしないかとか，頭でっかちのいびつな子どもになりはせぬかとかの心配はいらぬ心配である。そんなことよりは，読み・書き・そろばんに全然興味を持たないということの方が，はるかに将来が案ぜられる兆候なのである。

読み・書き・そろばんからはじまる知識教育のもつ何よりもの強味は，それが能力をもつものには均等に可能になるということである。家庭の経済的・社会的特権などここでは全く問題にならない。いかなる競争試験にもそれが公平に行われるものである限り，能力あるものは均しく打ち勝てるのである。社会的にも経済的にも特権ある家庭の子供たちへの，実力の挑戦のよろこびは知るものぞ知る。却って民主主義を売りものにする今日の方が，知識教育軽侮の思想をまき散らすことにより，能力外の特権をもつものに不当の利益を与えているといえよう。斜陽産業地帯の子供たちは能力があっても中卒どまりが多いのであるが，能力あるものを正当に選抜し，能力に応じて必ず進学させるための育英的努力がなされているという話はまだ聞かないから，こうした地帯の家庭に生れついた子供たちは一生の不作である。育英福祉政策が完全に確立されて子供たちが能力に応じて張り切って将来をのぞめる日の一刻も早からんことをのぞみたい。

個人差を逆に利用して，貧しい環境に生れたものが何かにつけ貧しい条件に追われるのは，本人の環境差だから致し方ないといわんばかりの底流があるやに見ゆるは私のひがめか。しかも革新を自称する人たちが，能力選抜を差別教育として攻撃しているのは，ちと勇気と知恵が不足していはしないか。将来に理想を棚上げして現在の処置を停滞させることは決して賢明なことではない。特権あるものは能力以上に自分の子どもを金に物言わせて進学させているのだ。特権なき家の子どもの中から，能力ある者を一日も早く選び出して上位へ進学させる具体策を立てることは焦眉の急である。一部の人たちのように特権者をこき下ろしているだけで，自らの向上を図ろうとしないことが，労働者階級の解放発展を阻害するようなことになりはしないのだろうか。国の福祉政策の貧困をつくのも結構であるが，総評もひとつ階級的立場の育英資金制度を暫定的につくって，貧しき労働者階級の子供の教育的救済を図ったらどんなものだろう。自ら指導者を生

み出し得ず，中産階級以上の階層出身の知識者にいつまでも指導されていたら，永遠に日本の労働者階級は解放されまい。尤も社会運動には学歴はいらぬから，何も社会革命運動の指導者が学校出である必要はさらさらないが，知識だけは必要であること今更ら云うまでもない。その知識も指導者だけ持てばいいというものでなく，労働大衆全員がもって始めて，独占資本を完全に制圧し得る態勢がとれるのである。とすれば働く大衆にこそ，知識が必要となる。この意味でも知識教育は必要なのである。だのに，読み・書き・そろばんなどどうでもいいと云われていては，大衆，否，人間そのものが迷蒙の淵から永遠に浮び上れまい。知識は大衆の武器である。知識は単なる手段や道具でなく，絶対的な存在として大にその積極的意義が謳歌されていい筈のものである。不正を断首するは知識の刃のみであるから，私たちは知識への勇気と信頼を持っていいのである。

本来ならば，知識教育は学校の本命なのだから，家庭は知識こそは学校のみに信頼してまかしていいのであるが，教育哲学が知識は道具であると一方的にきめつけているから，学校は雑炊の場と化し去り，無目的の知識教育の場となっている。一般には今日の学校は知識教育のみをやっていると思われているが，これはとんでもない錯覚である。今日の学校には知識教育なぞ，かけらもないのである。あるのは，受験虎の巻の暗記と，セントラの口写しだけである。セントラは先生用の虎の巻の生徒用語である。こんなものは知識教育では断じてない。そこで，外国語や数学や科学などの基礎をもっと身につけさせる方が子供の将来のためになると思う親たちは，無理してまでも，家庭教師をつけるとか，私塾に通わすなどして学校で受けた教育の手直しをはかっているのである。このことは何も受験準備のためのみではないのだ。新聞やジャーナリズムは受験準備のためのみに私塾や家庭教師が繁昌しているときめつけているが，それは片面観で，もっと基礎知識訓練をしなければ子供の将来のためにならぬと思えばこその，親の気持も正当に汲みとってものごとを判断する必要があろう。重ねて云おう，知識は道具ではない。力をもった主体なのだ。しかもそれは万人の手のとどくところにある。

家庭も，何事も新教育まかせと教師からの御指示を仰いでばかりいずに，学校が何を教えているか，いかに教えているかを，いろいろな教育哲学や教育理論から批判的に観察して，子供の教育に方策を立てても，決して教師を無視することになりはすまい。親たちはいろいろな教育哲学や教育理論を如何にして知り得るか。最善は自ら研究することであり，次善は賢明にして公正な教育評論に意見を求めることである。これが不可能ならば，自らの眼による，教育の事実についての判断である。教育学者たちも一般市民に教育の哲学や理論を語る必要があろう。ひとは誰しも教育されてきた経験を持つから，良識ある人ならば教育についての識見を持っている。ＰＴＡを通しての八百長的教育談義は教育の発展には余り役に立たない。そこには臨席の教師たちへの気兼ねから，教育に対するきびしい批判が欠如しているからである。自分の子どもたちを私塾や家庭教師の許にあづける親の心裡には，学校の教師に気兼ねしていいたいこともいえない，遣瀬なさが潜在していることを忘れてはなるまい。凡てを受験地獄の罪に帰して事態を甘かしてはい

けないのだ。合格者よりも落伍者の方が自然に数が多くなるから，ペン・マーケット確保の必要上，多数者に同情する教育ジャーナリズムや教育評論が些か巷に氾濫しているようだが，これは日本の教育の発達のためにも，子供たち個人のためにも，余り益のあることとは思えない。知識を道具と解し，知識獲得のために苦労することを軽蔑する風潮は日本の現実から払拭しなければならない。

少なくとも学校教育の課題は子供たちの頭をより良くすることが先決条件となるべきである。残念ながら今日の学校教育は，コソコソと詰め込み教育をやっているくせに，知識教育を看板にする勇気がないから，その表看板たる全人教育とやらまでが不徹底になり，ひいては知識の発達も貧困になっている。しかもマル・ペケ式の試験の準備勉強で教育が塗りつぶされては，子供たちの知識の世界は枯れ果ててゆくのみであろう。

教育は新世代形成にかかわる事の故に，古来，権力欲をもったものたちによって利用されることが多かったが，それとともに，軽視すべからざる現象として，教育が営利事業の対象にされ易いということがある。道徳教育の復活の傾向をみるや，先づ動き出したのは道徳教育解説書を書いて金儲けしようとのたくらみであった。今後も資料解説書を書いて印税を狙う企ても無多きことであろう。教科書の国定反対も本音とするところは，教科書作りの営業が邪魔されることにあるのではなかろうか。近頃は学習理論の展開で，これ亦営利を狙って新手の学習書が書籍市場に氾濫して，教育ママたちの気をもましているが，これに教師と書物屋をつなぐリベート問題が絡んで物議をかもすほどになっている。

マルチョイ式の客観テストにしても，客観テストそのものには決して悪いところはないのであるが，心なきひとたちが，テストやその準備書の印刷によって営利志向するため，子を見るに愚なる親たちや受験ノイローゼの弱気の子供たちの射倖心をそそり，あるべからざる偏向学習を生じ，学習内容を低下させるところにテストの弊害も出てくる。もとより準備が利くような客観テストを作る側の責任の問わるべきことも云うを俟たない。親たるもの，教育の，特に学校教育の本質をよく理解し，教育を歪める雑音防止の態勢を整備する必要があろう。

学校以外の場所で知識教育が補強されるということは，学校しか教育の場を持ち得ない庶民大衆の子らは，知的荒涼の場に放置される結果を来すことを意味する。私塾や家庭教師を利用出来る余裕のある家庭のものはいいが，そうでないものは非常に不利な条件下に立たされることになる。これほど非民主的なことはないのだ。家庭教育は本来は道徳教育や宗教教育と提携すべきものであって，知識教育の責任を負わさるべきものではない。家庭は子供たちに学習の場を提供するものでこそあれ，知識教育の基礎訓練の場所では決してない。またそうした場所たり得ないものである。幼児のときには，遊びに託して数え方を教えたり，絵と関連させて読み書きの手ほどきをしたり，小学校低学年頃の子供には，日常生活に読み・書き・数えの反復練習の機会をとらえて簡単に事上練磨させることぐらいはどの親にでも出来るが，これ以上に学年が進めば，親として能力外のことになるから余り指導の手を下さぬがよい。大体，親は自分の子供を教育出来な

いものである。特に所謂知識ママが，いろいろな指導書やテストや学習本を買って来て，それによって子供にいい点をとらそうと異常なまでの準備をさせている例をきくが，これ亦愚劣なことである。こんな馬鹿げたことに家庭教育の本旨があるのでは決してない。

知識教育に関して今日の教育は予想に反して，学校がなきにひとしい状況である。これは知識教育を第二次的なものとしているという意味に於てである。うちの子供は躾が悪いから学校でうんと道徳をやってくれとか，お宅の子供さんは教科の成績が悪いから家でうんと知識学習させてほしいとかの，親や教師からの要求はその起り得る源泉を考えると甚だ興味がある。知識は単なる道具であるから，生活学習の場の中に偶然的に置いたらいいとの考え方が支配する以上，いくら知的教科の時間をふやしても，知識教育は行われざるに等しい。従って子供の教育上家庭で考えなくてもいいこと，否，家庭では不可能なことすら，家庭で考慮しなければならないという現象すら起ってくる。知識基本学習に対する親たちの不安も，要は学校不在に対する不安である。幼児の知能をのばす工夫，子供の才能発見，学習の強い子供のつくり方，成績の上がる勉強の方法，などにつき，親が中心になって考えなければならないとは何という愚かしき悲しさであろう。

学校で得た基礎学力にもとづいて，子供たちが自発的に学習するのが本来の姿であるべきである。親はただそうした学習条件を整備してやればいい。それ以上の世話は子供たちを毒するだけのことだ。私が知識教育と家庭教育という問題をとり上げたのは，親の指導の仕方を論ずるためではなく，家庭に於ては，知識教育こそ完全に自発的になさるべき，重要な教育であることを動機づける雰囲気をつくる必要を強調したかったからである。また普通以上の能力をもつ子供なら，自力で勉強にいそしむものである。家庭は子供たちに勉強の習慣をつけることの一点にしぼれば，知識教育に対する家庭の責任の大半は果されよう。親が，特に知識旺盛のママさんたちが，子供の学力テストなどの点に神経質になって，学校の先生に談じこんだりするなどは身の程知らざるも甚しいものといえよう。親として教育の方向や哲学について論ずることはいいことであるが，テストの結果に目に角立てるのは止める方がいい。

がひとり黙々と勉強する習慣がついていない子供たちをみることは，親として大きな不安であることはたしかに事実である。またひとりこつこつと勉強することを立身出世主義とか，利己主義とかいって非難するムードものぞましいものではない。秘密裡に勉強して，ひとに自分の手の内をみせないなどと，知識勉強にはげむものをさげすむのは，能力なきものの劣等感か，利己的小市民根性の然らしむるところのもので，知識尊重の思想には何の関係もないことである。人間尊重の前に知識尊重が先行する。従って知識を道具視して，人間発達に対して持つ知識の主体性を無視するとき，人間尊重など有り得べくもない。知識の人間生活に於ける積極性を理解し得ない状況の中で，系統学習よりも生活学習をより優位視する教育的風土に於て，勉強する習慣がつく筈もない。

生活の合間合間に知識学習することをすぐれた教育哲学と思いこんでいることから，知識を主体的に把握して系統学習することを亜流扱いにし，生活学習を本命とする学校教育の習慣がまだ

拭い去り難く，肝じんの知識の体系的習得は行方不明になり，後に残されたのは断片的な知識暗記のみとなる。そこへもってきて採点に便利だからとの理由だけで所謂マル・バツ式の試験をすることになり，受験勉強もそれに即応する故に，子供たちの頭はますます編輯の粗末な豆百科辞書になり下がる。なおその上に知識の体系的学習は文部省の天下りカリキュラムだからいけないとの牢固たる信念が教育界の一部人士に根づけられていて，学校教育の正しい運転を妨げている。いかに内容が正しくとも，官庁が定めて下におろすことが絶対にいけないとされる。たしかにひとつの理屈ではあるが，余りにも形式的な考え方であろう。そこで知識のことを素直に考える一般の立場では，教育哲学がどうあろうと，自分の子どもたちが，屁理屈だらけの似而非の知識に汚されるのに，むしろいきどおりをすら感じて，比較的素直に知識体系をとり上げている私立学校に子どもたちをやるか，家庭教師をつけてみっちり仕上げるか，私塾に通わせて反復練習させるかなどするのである。

問題はそうしたところへ子供を上げられない階層の子供をどうするかである。国民大衆の子供たちをあづかる公立学校自身，もっと真剣に，大衆の子らをいかにしてより賢明にするかにつき，ひとつ覚えの教育原理や教育哲学でなしに，広く世界を見渡して，確固たる足場を見つけてもらいたいものである。卒業後いかなる環境にありても学習のチャンスを利用出来るよう，遺憾のない基礎知識訓練が学校に於ては施される必要があろう。産業のオートメ化や家庭の機械化は，学校を職業教育のためのすたれかかった手段たらしめるに至った今日である。現実の産業運営はもとより，家政の運営すらもが，その技術水準に於て向上し，技術水準の向上は，学校が授けることを本命とする，読書・数学・科学的理解その他の知的技能をますます要求するに至っている。語学教室，化学実験室，数学的記号が一杯に書かれた黒板などが今日の学校の機能を示す代表的なもので，木工室や家政教室は今日では学校機能の代表をなすものではない。

かく学校の機能を考えてくると，知識教育に対する家庭の役割は，家庭がそれを代行するというよりは，現在の学校がしている雑役的課題から学校が解放されるよう，学校活動の純粋化への助力をすることである。差当り道徳教育などはむしろ家庭がその本命の場所ともいえるだろう。家庭が道徳教育の責任をもてば，学校に於ける道徳教育もその負担が軽減され，学校も気が楽になろう。僅かの時間の学校の道徳教育で人間道徳が形式されるなら，人間社会に悪や罪はとっくの昔になくなっていた筈である。元来，人間の道徳形成は，家庭・学校・社会の共同負担たるべきものである。だのに，道徳教育が学校にのみまかされ，知識教育が家庭の責任にされたりするから，人間教育の状況が混乱してくるのだ。

Ⅱ　３Ｒ教育の比較史的考察

３Ｒ，即ち，よみ・かき・そろばんが庶民教育の基底として成立した跡を，西洋教育史にふりかえりみることもこの際必要であろう。従来の学校教育の歴史は３Ｒに新しい３Ｒが附加された歴史に外ならないからである。

宗教戦争による破壊の後，ドイツ，デンマーク，スエーデンにおける宗教改革は，カトリック教区学校や既存の都市学校の増改築または新設により，大衆のために，母国語により教育をする学校の発展を促進した。かくて民衆の間に母国語教育をひろめる努力は現実に成功したこともとよりである。印刷された書物の使用の普及は，ルッターによる聖書のドイツ語訳，ルッターの問答書や讃美歌集，ルッターや彼の同僚によって書かれた教科書などの広汎な普及を可能にした。ブーゲンハーゲン（Johann Bugenhagen 1485–1558, メランヒトンとともにルッターの追随者）はドイツ諸邦に母国語学校をつくるのに貢献し，すでに存在していた私立学校に対する規制を企てるまでになった。デンマークとスエーデンはルッターの線に沿ってその学校を改造した。30年戦争によって破壊されて了う以前に，モラビア教団（ジョン・フッス派の宗教改革運動から生した，ボヘミア地方のキリスト教団）も良き母国語学校を持っていた。

かくて母国語によるカリキュラムは，聖書を読むこと，ルッターの問答書を学習すること，ルッター訳のイソップ物語を読むこと，ルッター派の讃美歌を歌うこと，可能なときは，歴史・体育・算術などをふくむようになった。基礎的な 4 R（reading, wrighting, arithmetic, religion）が歴史・音楽・体育とともに，ルッター勢力の強い国々の共通母国語学校の基本カリキュラムとなるに至った。

ルッターと同じようにカルヴィンも母国語学校を強調した。そこでは子供たちはカルヴィン派の問答書，母国語による 3 R，カルヴィン派の讃美歌歌唱を学ぶことが出来た。ユグノー教徒（フランスのカルヴィン派プロテスタント）は出来る限りフランスの各地方にこの型の学校をもちこんだし，ドイツ改革教会は勿論ドイツ語で教えながら，西部ドイツの諸地方で母国語教育を企てた。オランダ改革教会はヨーロッパのどの国のよりも最善の母国語学校と考えられるものをつくった。オランダ地方の商業都市の実際的要求に刺戟されて，オランダの学校は，少年少女のために 3 R と宗教を教え，アメリカのオランダ移住民のみならず，英国やアメリカの清教徒にも影響を与えた。スコットランドの学校が17世紀と18世紀につくられたとき，若干母国語型のものもつくられた。

カトリック教会も亦ルネサンス期に母国語学校を発展させた。それは多分プロテスタント側の成功に刺戟されたことによろう。ポール・ロワイヤル派キリスト教学校同胞協会も，一部の婦人教団がなしたようにフランス語で教えた。主として中等教育に関心をもっていたオラトリ派（通俗的な説教や祈りを目的として1564年にローマにつくられたカトリック教牧師団）も初等学年には大部分の教授を母国語でした。これらの学校は勿論新教よりも旧教を強調したが，大部分は新教派の学校に類似していた。地方の聖職者によって教えられた教区学校もトリエント会議の警告に応えて増加し，これらの学校は徐々に，牧師たちが，配置された国の国語で教えることになった。

英国の宗教改革の本質的な一局面は，英国々教会の使用用語がラテン語から英語に変ったことであり，これは国教会派の牧師によって教えられた教区学校の用語が英語になったことを意味す

る。この場合の教授に於て，教会小祈とう書，祈とう書，聖歌などが用いられていた。カトリックの修道院や祈願所学校の消滅は，小学校に於けるラテン語教授をなくすことになった。家庭教師，私教師，老婦人経営の初等学校（dame school）が，牧師たちの行う英語教授の補習をした。凡てこれらは，子供の態度や，正しい行為に注意を払うとともに，読み，書き，問答書，算術の一部などにも注意した。アルファベットと主の祈りをＡＢＣ帖，即ち，言葉が印刷されている羊皮紙でおおわれ，雲母に似た透明の角材のうすいカバーで保護された小黒板を用いて，学ばれるようになった。

英国清教徒の間では母国語である英語の使用が重要視された。非国教派牧師によって指導された小学校では，英語が，カルヴィン派の宗教が教えられる媒介の言葉であった。公礼拝式統一条令（the Act of Uniformity. 1662年公布され，凡ての教職者は国教会監督より按手礼を受くべく，公私立をふくむ凡ての学校の教師は国教会に忠誓を要求した）が清教徒を地下に追いやったときにも，これらの学校は活動をつづけた。17世紀の終り頃になって信教の自由がかちとられたとき，小学校の教師はグランマースクールの教師がそうであるように，大僧正からの免許を必要としないことが定められた。かくして非国教派の学校が18世紀に栄えだしたのである。

中等学校段階に於てさえ，母国語の教授が，清教徒牧師によって教えられた所謂非国教派アカデミー（Dissenters' Academy 1662年の統一令により非国教徒は圧迫されたので，彼らだけでつくったアカデミーをいう）に於て共通のものとなった。これらのアカデミーは古典を強調することにより始まったが，徐々に経済的科学的影響の下に，その計劃をひろめ，ついに17世紀に於てどの中等学校よりも最も広いカリキュラムを備えるに至った。凡ての教授は英語でなされるようになり，標準的な古典研究に加えて，非国教派アカデミーは，７自由科の中の６科目（文法，修辞学，論理学，算術，天文学，幾何学），３角法，代数，地理，測量，航海学，倫理学，歴史，経済，政治学，自然科学，解剖学，形而上学，若干の近代語などの授業をした。凡ての学校がこれらの科目を全部教授したのではなかったが，全体としてこの種の型の学校はこの範囲の学科目をふくんでいた。この型の学校は50から60位あった。18世紀になるとこれらの学校はアメリカの私立学校やアカデミーに大きな影響を及ぼすに至った。科学の発達や生活的実務の発展の及ぼす影響は，自然科学，実用的技術，社会科学などの科目に著しく表われた。これらの科目は，従来の厳格な宗教的目的をもった学校教育の中には必ずしもふくまれなかったものであった。非国教派アカデミーから由来する世俗的教科の中等教育への進出は重要な教育史上の出来事である。

宗教改革が庶民の子供たちのためにつくった母国語学校の外に，特に非常に貧しい家庭の子供たちのために，僅かながら職業訓練をしようという傾向が出てきた。ドイツではルッターが凡ての子供に商業を教えることの重要なことを説いたが，これは家庭でなさるべきであるとされた。15世紀にドイツの都市に発達した，読みと計算の学校の発展と結びついて，商業目的の一種の職業教育を施す別の施設があった。これらの学校は宗教改革運動の継続中も書き方，商業算術，簿記などを教えつづけた。オランダ地方では商業利潤を支配する国に於て期待されたように，商業

教育に相当の考慮がなされた。1531年のはじめ頃，子供は学校へ行くことを義務づけられるか，商売人の徒弟になるかを必要とする，ひとつの法がつくられた。都市の役所は職業訓練を与える学校をつくるよう命ぜられた。ここに，英国の伝統に従って，アメリカのオランダ移民や英国移民に影響を与えることになった職業教育の伝統があった。職業教育が，商業の最も進んだ国々，即ち，ドイツやオランダや英国に於て，最も有効にはじめられたのは決して偶然ではなかった。エリザベス朝時代の英国で，貧しい子供のために，強制的な徒弟奉公と働く家の設立についての立法が企てられた。1562年の技術工令と1602年の救貧法は，多くの下層階級から土地と仕事をうばった，農業から商業及び家内工業への経済的利益の変遷を考慮して企てられたものであった。経済不況による失業救済のため職業教育を考える習慣はこのように早くからあったわけである。17世紀に清教徒派の改革者は，職業教育を学校に拡大することに熱心だった。ある人は技術学校が商人のためにつくらるべきことを主張し，ある人は農業，航海学，商業などの実際的な科目に非常な注意を払ったし，また一部のひとは，商業，工業，農業，教育に科学を適用する仕方の研究を強調した。これらのひとびとは清教徒のもつ商業的実際的関心を代表するものであったが，分離派のアカデミーは，以上の諸科目にいくらか注意を払うとともに，教育に宗教的古典的伝統を保有することを否定はしなかった。

注目すべき重要なことは，職業教育が民衆により統制されはじめ出してきたということ，及び，経済的条件の成長により，18世紀と19世紀になると職業教科に払われる注意がますます大きくなってきたことである。この頃の職業教科は徒弟奉公によってのみならず，学校でも実際に教えられるようになった。職業的な教科が学校に入ってきたことは，自由教育対職業教育の教育論争を激しく惹起したものの，近代教育史上最も重要な出来事のひとつである。宗教改革が，教育は現実の生活の要求に子供たちを適合さすべきことを主張したことが，実用的職業教育の促進発展への要求となった。

前に一寸ふれた15世紀のドイツに表われた書算学校につき状況を一寸説明しよう。そのころ私教師たちは自らを防衛し，教える権利を獲得するためにギルドを結成しはじめ，書き方，商業算術，簿記の教師たちは算術家（Rechenmeisters）のギルドをつくった。彼らは数年間徒弟奉公し，その終りに筆字者（Schreiber）として知られる日雇職人になり，遂にはギルドの完全に１人前の親方となった。ここに於ても読み・書き・そろばんは庶民生活の基本的要求だったのである。

教育史上に名高きコメニウス（Johann Amos Comenius 1592–1670）をみると，彼は，宗教改革の教育理論家としてすぐれた人であるが，18世紀と19世紀に於ける感覚実在論（sense realism）の広汎な適用の途を開いた。コメニウスは科学の方法を，教育理論，カリキュラム，方法に適用しようとした。凡ての授業は，子供の発達に示される自然の秩序を追って　注意深く段階づけられ調整さるべきであるとされた。このことは，簡単なものから複雑なものへ，既知のものから未知のものへと進むことを意味した。凡ての教授を通して子供の理解力は子供の感覚経験に訴えることにより発展させらるべきであるとされた。かくてコメニウスは，子供は可能な限り現実の対

象を知ることにより，そしていかなる場合にも絵と事物の提示によって，学習するものであるということを強調した。彼の多くの教科書は豊富な絵入りの例証があり，かくて彼は学校児童の教育の中に絵本を導入した。彼の「世界図絵」は最もよく知られるものである。彼は簡単に描かれた絵を導入することにより，言語教授を改善し，母国語の文章とラテン語の文章とを並べて説明した。

「大教授書」に於てコメニウスは彼の教育理論，学校のカリキュラムや組織の改善計劃をのべている。概して彼は汎知主義即ち凡ての子供に凡ての知識を教えることを通して社会改革の可能を信じていた。６歳までの幼児学校でコメニウスは感覚を訓練し，遊戯とゲーム，お伽話，韻文，音楽，手工活動を通して，道徳的，宗教的，身体的発達をもたらそうとした。６歳から12歳までの母国語学校では，３Ｒ，唱歌，宗教，道徳，政治経済，歴史，機械技術を教えようとした。12歳から18歳までの古典学校に於ては，ドイツ語，ラテン語，ギリシヤ語，ヘブライ語，文法，修辞，論理学，数学，科学，芸術が教えらるべきものとされ，大学は学校体系の最上位におかれた。凡ての段階に於て，教科目は，注意深くクラスに組織づけられ，生徒の能力に応じて段階づけられた。また学校年度も注意して決定された。学校での一日の中の科外教育活動の時間も慎重にきめられた。学級は，得らるべき社会的利益のための集団としてつくられ，いろいろな教科は出来る限り相関づけられた。凡ての活動に於て学校は，生活のために実際的なものであることが必要とされ，それは道心堅固な宗教生活に属すべきものであった。

コメニウスは彼の時代より先に進んでいたから，彼の同時代には余り効果的でなかったが，彼が提案した多くの近代性は，近代の文化の動きを彼が深く洞察していたことを示している。彼の助言は，ポーランド，スエーデン，ハンガリー，英国などで求められたとはいえ，コメニウスは，三十年戦争の破壊の故に，彼の生国ボヘミアに於ては散々な目にあった。彼の所属宗派は迫害される側のものだったので彼の仕事は余りみとめられなかった。が近代教育の原理はコメニウスより始まるとされるのが教育史的定説である。

フランスについては，18世紀のはじめ頃フランスの学校の管理と維持は，カトリック教会の諸教団の手中にあった。例えば小学校レベルではキリスト教学校同胞協会が貧しい不幸な人たちに慈善教育を施した。シスターたちの一部の教団も少女たちに小学校教育を行った。ジェスイットたちやオラトリ派の教父たちは，中等教育を支配したが，ジェスイットたちは政治に非常な関心や勢力を持っていたので，反対も多く，彼らの学校は1764年に閉鎖され，教団は1773年から1814年までに法王庁から弾圧された。18世紀の中頃，百科全書派たちは専ら国家により統制された国民教育体系を求める運動をしはじめた。人道主義的民主主義は，常に，教育は普遍的，無償的，義務的，世俗的たるべきことを要求し，この理念はフランス革命の本質の一部をなすものであった。

革命家たちは，新しいより一層民主的な社会をつくろうとしたから，新しい社会をつくり維持するための手段として，いかに教育が重要であるかを理解していた。革命第一期に教育について

のいくつかの声明が出された。1789年の国民議会は，古典的でなく近代的実用的研究に重点を置く教育を要求した。国民議会の間，ミラボーとタレーランは，宗教的でなく，国家主義的な性格をもった人間をつくるような世俗的教育案を発表した。1791年の憲法により，立法議会は無償の公教育制度を提案した。この中で最も有名なのがコンドルセー（Condorcet 1743–1794）のつくった案である。

コンドルセーは，凡ての子供に平等の機会を与え，無償，義務，普通の教育を与える完全な国民教育体系を発表した。市民的，国家的，民主的目的のために世俗統制下の国家の市民を発展させることをコンドルセーは目標とした。凡ての子供たちのために，徒歩通学可能の範囲内で，国中の至るところに小学校の創設を提案した。つぎに庶民のために進歩的な教育を与えるために凡ての中都市に中間学校を，古典的教育のみならず人民の要求に適合した諸教科を提供する中等学校若しくは研究機関を大都市に，設けるべきことを提案した。最後に伝統的な大学の代りに，高等教育及び専門職業教育をするためリセー（lycée 国立高等学校）9校を要求した。凡ての仕上げとなるのは，学者たちが全教育体系に影響を及ぼし得る国立技術科学院であると考えられた。コンドルセーの教育計劃は実行には移されなかったが，他の計劃や法律の中で後年実現される諸理念を提供したのであった。

共和国制定後，国民評議会は国家的教育体系をつくり，財産を没収し教団を抑圧して教会学校を破壊しようと企てた。1794年には，地理や自然研究とともに，フランス語で3Rを教えるためのみならず，愛国的な歌や話，基本人権宣言を教え込むことによる共和国理想を吹き込むために，人口千人毎に一つの小学校をつくることを規定する教育法がつくられた。1795年の法は，数千のコンミューンのそれぞれが3Rのための小学校をつくり，12歳から18歳までの子供たちに古典的近代的教育をするため，人口30万人毎に中等学校或いは中間学校をつくるべきことを規定した。

アメリカについてみれば，総じて18世紀の小学校は子供たちに読書と宗教の基本を教えるための学校であった。はじめは英語の手紙を書くために企てられた。かく読書能力をつけるという理想が最初の目標となり，それは宗教的教材を読むことにより達成されるのであった。他のことは余り希望もされず，また実行されもしなかった。時に若干の書き方と算術が教えられた。普通にはこれらの科目はところどころにある書き方学校で教えられ，一般にこれらの書き方学校は読み方学校より進んだものと考えられていた。読み方は，ニューイングランド地方の都市の学校，老婦人たちが教えた学校，家庭教師，教会学校，外国地区福音宣伝協会の慈善学校などで教えられた。

18世紀に使用された読本の中で最も有名なのがニューイングランド小学読本（the New England Primer）であり，これは英語で印刷された小学読本にもとづいており，18世紀のはじまる丁度前にアメリカで印刷されたものであった。この書は18世紀末までに幾版か増刷された。このことは読みの学習が清教徒の宗教的情操にいかに完全に滲透されていたかの例証となる。この小学読本の中には，大文字小文字のアルファベット，音節表，道徳概念を強調することばの表など

をふくんでいた。道徳概念を強調することばというのは例えば，悪口・魅力・無茶・飲酒・才能・敬神・軽卒・退屈・忠誠・名誉・謙遜などであらわされるものであった。それからアルファベットの文字をしるし，ピュリタン主義の暗い調子をもった宗教的道徳的韻文をつけた，有名な木版画があらわれた。読みものは通常，「義務をつくす子供の将来」，「青年用のレッスンのアルファベット」などの見出しでつくられ，主の祈り，福音信条，十誡，暗記用の新旧聖書の書物のリスト，宗教詩，宗教話，ウェストミンスター問答書などをふくんでいた。ローマ数字やアラビア数字を学ぶことによる初等算術が，聖書の中の章，詩篇節を見出すための手段と考えられることにより，宗教訓練の一部となった。18世紀の終り頃になると，小学読本は新国家の発生とともに愛国感情をも盛り込むようになった。特に独立戦争後は愛国主義的，国家主義的感情が濃くなった。

独立戦争後は世俗的な教材もかなりふくまれるようになった。不良な少年少女の罰についての話も地獄に落ちて永久に苦しむというようなものはなくなり，りんごや菓子やくるみを悪いことをしたものにはやらずに，善いことをしたものにやるというような話になった。また読み方の学習の実際的な価値が重んぜられるようになってきた。例えば祈とう書などにも，いろはを決して学ばぬものは永久に阿呆だが，文字を正しく学ぶものは戸外散歩をする馬車を買えるだろうというような内容をいれるものも出てきた。祈とう書は独立戦争後はその根拠を失い，別のものがあらわれるようになった。その中で最も有名なのが，ノア・ウエブスター（Noah Webster 1758–1843）の小学綴字書（Elementary Spelling Book）である。ウエブスターはその愛国主義的道徳的文章で人気のあった人であり，この書は1784年に出版されて後百年間祈とう書の中で最も通俗的なものであった。かく18世紀にはじめられた小学カリキュラムの世俗化は19世紀になって急速に進展するのであるが，これは３Ｒを中心とする世俗カリキュラムの内容の拡大を意味する。

では19世紀の西欧諸国の初等教育に於て３Ｒを中心とする学校教育が展開する概況を考察しよう。

この世紀のはじめにスイスに起った重要な教育の発展に私たちは先づ注意しなければならない。それはかの有名なペスタロッチー（Johann Heinrich Pestalozzi 1746–1827）の教育運動である。彼は18世紀の末に，スイスを荒廃に導いたフランス戦争の結果として，スイスの下層階級をおそった貧困と家庭の崩壊に深く心を傷めた人である。独立自尊の能力のある個人を発展させれば，社会は改善されるものだというのがペスタロッチーの信念であった。先づ彼は，戦争で父を亡くした哀れな子供たちのために，ノイホーフとスタンツに孤児院をつくり，後にブルグドルフとイヴェルドンに男児のための寄宿学校をつくった。19世紀第一４半期中最大の名声を博するに至った教育活動がここでなされたのである。

ペスタロッチーは同情と親切で学校を指導しつつ，おだやかな訓練，子供への愛のいつくしみ，宗教的道徳的感激を教育の推進力として健全な家庭生活の理想を復活しようとした。小学校のカリキュラムの内容を拡大し，普通にみとめられている３Ｒの外に，地理，自然研究，図画，音楽

の授業を小学校カリキュラムの中に導入することにつとめた。凡てこれらの科目に於てペスタロッチーは，モデルと実際の対象物を，それを記述する記号と意味とに連結することによって，子供たちの感覚を通して学習材を理解させる方法を強調した。感覚実在論とおだやかな訓練の方法によって，凡ての個人の精神的，身体的，道徳的な力を発展させることの重要性を強調して，当時の学校に於て普通行われていたより以上に，自由な初等教育を行ったのである。

ペスタロッチーの影響を受けた二つの別の運動が，後にアメリカ教育に影響を及ぼすことになった。一はフェレンベルグ(Philip Emmanuel von Fellenberg 1775–1846) のそれで，下層階級や農民の間に技術的知識や技能を広めるために，農業的，産業的技術の実際的訓練を重視した。フェレンベルグは，下層階級は，食糧，衣服，手工品，凡ゆる種類の品目の生産能力をますことによって，彼等の経済的，社会的地位を改善することが出来るだろうと考えた。もひとつはフレーベル (Friedrich Froebel 1782–1852) の教育であり，幼児のための彼の幼稚園は，幼児が普通の小学校に入る前に，幼児の精神的，道徳的，表現的な能力を発展させる重要な手段となった。

19世紀のはじめの自由主義的風潮に刺戟されて，ドイツの国民学校は，ペスタロッチーの理想の影響を受け，基本的カリキュラムとして３Ｒの外に，自然研究，地理，図画，音楽をふくむまでに広められたが，宗教的道徳的教育の重視，国家への忠誠心の強調は依然教育の中核であった。そしてドイツ帝国を称讃する歴史や文学がやがて国家主義的忠誠を強化する手段として，カリキュラムの中へ入ってくるようになり，軍事訓練としての体育もあらわれてきた。これらの科目は19世紀全般を通じて基本的な小学校カリキュラムを構成した。即ちプロシヤ専制政治の政略手段と教育は化し，君主国及び帝国の，従順な，忠良な，謙遜な臣民をつくり出すため，宗教や国家主義を中心に性格づけられたカリキュラムとはなったのである。教授方法は，生徒の自主性や工夫創造力を発展させるためよりは，規律，教師の権威への服従，権威化された教科書への依存を強調するのに役立つよう工夫された。しかしドイツの知恵はマルクスにその鋭鋒をあらわしたことをこの際忘るべきではない。

フランスの小学校教育の保守的理想は1808年ナポレオンによって強力に表現された。彼は，学校はローマ・カトリックの宗教を教え，皇帝への忠誠心をふきこみ，教会，国家，家庭に献身する市民をつくり出すべきであると主張した。この理想を追って，1833年の教育法は，３Ｒと道徳と宗教の教育に小学校の教育課程を固定した。このカリキュラムは1850年に若干広められ，小学校が希望するならば，歴史，自然研究，地理，図画，音楽のような科目をカリキュラムにふくむことが許された。

これらの科目を完成するために高等小学校が創設され，幾何，測量，農業，産業技術，商業の科目が加えられた。高等小学校は，農場，工場，都市に於ける労働能力を改善するための経済的動機によって出来たものであるため，中等学校側から反対され，社会的承認がなかなか得られなかった。上流階級は，自分の子供を劣った学校へはやらなかったし，勤労階級は，家庭の収入をふやすために家庭で年長の子供を使わねばならなかったので，基礎教育以上の教育を与える余裕

はなかった。

フランスの初等教育に於ける主要な変化は，1882年に制定されたフェリー法（時の文相フェリーによりつくられた教育法で，これによりフランスの近代的国民教育体系は確立し，初等教育は世俗的無償義務制となった）とともにはじまった。この法はカリキュラムの世俗的な面をひろげ，宗教教育を限定しようとした。特殊な宗教信条は教えられなかったが，神，家庭，共和国に対する子供の義務についての道徳教育は重んぜられた。かくて基本的な小学校カリキュラムの中に，道徳教育，市民教育，３Ｒ，歴史地理，政治経済，科学と数学，図画，音楽，少年のための軍事体操，少女のための裁縫がふくまれるようになった。教師の権威的役割，生徒の厳格な訓練と服従，国定教科書やカリキュラムの循守などが学校の内部生活を性格づけ，そこではフランスの栄誉が最高であった。

英国の初等教育は，国家主義的目的が歴史や地理の教科により派手に発展させられることはなく，カリキュラムの拡大も徐々になされたという点をのぞいては，他のヨーロッパ諸国と著しくは変らなかった。しかし，集権的なカリキュラム作成やカリキュラムについての立法も殆んどなかったから，英国一般の教育についての概念化は難しい。主として任意団体立の小学校カリキュラムは殆んど共通に３Ｒと宗教教育とから成り立っていたが，公立学校に於ける宗教儀式教育は1870年のフォースター法により禁じられていた。

日曜学校運動がロバート・レークス（Robert Raikes 1735–1811）により始められたが，レークスは新聞人で，毎週６日乃至７日間，日の出から日没まで工場で働いていた子供たちの教育の必要について世論を喚起する運動をした人であった。彼の主唱により任意団体立の私立学校が，３Ｒと宗教問答を，日曜日の子供らの自由な時間に，働く子供たちに教えるためにグローセスターにつくられた。日曜学校協会もつくられ，日曜学校運動はアメリカにもひろまり，そこでは19世紀の前半に日曜学校が人気を集めた。

産業革命に影響されてあらわれた教育の反応のひとつに幼児学校があるが，これは先づ，スコットランドの工場主，汎愛主義者であり社会主義者であるロバート・オウエン（Robert Owen 1771–1858)によってつくられた。児童の労働時間の縮少の要求に加えて，オウエンは，終日工場で働らく親たちの小さい子供のための学校をつくった。この学校は，宗教教育と，３Ｒの要素の若干を教えたが，簡単な遊戯，唱歌と踊り，２歳から５歳までの幼児保育に主として注意が向けられていた。ペスタロッチーの教育論が導入されて，授業は書物中心でなく，自然の対象に多くの関心が持たれるようになった。幼児学校の拡充発展のための協会もつくられたが，これより幼児の教育の機会均等実現の要求の承認に向って，更に一歩をふみ出すことになった。

小学校に一番影響を与えたのはランカスター（Joseph Lancaster 1778–1838）とベル(Andrew Bell 1753–1832)によって同時に考えられた助教制度（monitorial system）であった。ランカスターはその考えを英国及外地学校協会（the British and Foreign School Society）によって広めたクェーカー教徒であり，ベルはその考えが国民協会（the National Society）によって後援

された国教徒であった。助教教授の根本原理は年上の子供を教師のモニター又は助手として使うことによって授業がなされるということにあった。教師が一学課について助手に教え，助手は彼らが学習した学課を10人又は12人の少数の子供たちに教えた。壁にポスターや図表を張り，集団教授を助けるため，書物を買う金を節約するためにそれらが使用された。教科は主としてまだ問答集，読み，書き，綴り，算術などであった。

この助教制度の最大の利点は，集団方法，能率的経済的方法の使用により，最少の教育を多数の子供たちに利用させることが出来る点であった。体罰は禁ぜられ，罰は円錐形の帽子（悪いなまける生徒に罰としてかぶらせる）をかぶらせることや，教室の隅に立たせることに限定せられ，褒賞制度が子供らの興味を高めるために使用された。絶交や嘲笑が鞭打ちにとって代った。子供たちは，行進や賑やかな活動やほおびのために，幾分か前よりも学校をたのしみ出した。この助教学校は19世紀のはじめアメリカでも大流行したものだった。教員不足を補う有力な手段たり得たからである。この方法は１人の教師が直接に子供たちに当るという従来の教室風景を破るものでもあった。

慈恵的要素は多分にあったとはいえ，貧児や労働児童に対する教育の手がさしのべられはじめたこともこの世紀の教育のひとつの特長といえるだろう。また幼児に対する本格的な教育がフレーベルにより始められたのも教育の大きな進展を示すものである。世俗化の傾向において学校教育が幼いものにまで拡げられて行ったことに西欧教育の進歩性が認められるのであるが，更に貧児，育児，聾児などに対する学校教育が社会福祉の立場から企図され出してくるのも時代の大きな発展を示すものであろう。

読書能力の普及拡大の理想，専門的事項についての知識の獲得の理想が，19世紀になると精神訓練の理想への挑戦として出現するに至った。小学校段階では３Ｒの基礎教育による読書能力の教育が，宗教改革の時代から盛になり，宗教的伝統によっても支持された。一方に於て普通選挙の民主的思想が公立小学校の基本的任務としての読書能力教育に更に刺戟を与えた。知識そのものの獲得も当時の社会各層に於ける科学知識の人気によって刺戟された。科学の伝統，学問的研究の理想，ソーンダイクらの新しい「刺戟――反応」心理学などに援助されて，知識が，精神訓練にまさる位置に立ち，各種の科学や専門知識が高等学校や大学にカリキュラムとして導入されるようになった。このことは，教育が，教科領域に組織された知識体系の習得と同じであることを意味するという考え方を，学校側に固定することになった。また，教科書教材の学習と習得の吟味としての試験に合格する能力を養成するための，講義，記憶，反復訓練などの方法を正当化するために知識教育が利用された。

その後，科学，技術，産業資本主義，民主主義などの躍進とともに，実用的職業的目的が，19世紀のアメリカ教育に於て，その位置を強化すべきことが要求されるようになった。知識の目的に加えて，実用的有用性が，精神訓練の教育理想に挑戦し，高校生や大学生が，特殊細分化する職業に入る準備をする特別コースが学校カリキュラムの中に導入された。各人は立身出世するた

めに生計を得るよう訓練さるべきだという資本主義的信条，各人は生涯の事業に自らを適合させる機会を持つべきだという民主的理想によって，科学と，その産業への適用が強調された。知識教育尊重論者と職業教育強調論者との間に大論争が生じた。が知識教育の訓練性と職業教育の実用性は排他的関係に立たず，訓練的な実用科目，実用的な訓練科目という風に，かみ合された。訓練的であるのみならず実用的であるという点で，古い教科に対して新しい教科の優位が要求された。訓練性をもすてていないからという理由で，新教科がとりいれられるのであった。こうした敵本主義的戦略性は，いろいろな科学や近代語の教育の歴史も例証するところである。より新しい教科が，古い教科と同じように非常に訓練的であることを主張することにより，新しい科目を学ぶために伝統的な学校に入るということもあった。もっとも実用的職業的目的は特に大学に進学しないもののコースや，大学の技術コースに於いて強調せられたことは云うまでもない。

中等教育や高等教育の社会的目的が指導者の訓練という貴族主義的なことばで早くから存在していたのに対し，19世紀の民主勢力は万人のための市民教育の重要性ということを強調しはじめていた。社会生活の複雑化とともに，大学や諸学校は国家の市民を，その義務や責任のために訓練する直接の努力をなすべきことが必要だということが多くの人に明らかになった。この目的が教育の凡ゆる段階に社会科の導入を促進し，歴史，政治，経済，その他の社会諸学への関心を刺戟した。極端な愛国主義や国家主義的アメリカ化の計劃が18世紀の頃からなされていたが，現実的合理的な方向で多くの異った要素をひとつの国民に接合し，民衆の間に基本的民主的態度をしみこませるために，学校が重要な役割を演ずるのを，この社会科教育が助長したのであった。この社会科発生の意義が，戦後日本に社会科が導入されたときは忘れられ，専ら個人解放の方向に於て捉えられた。

資本主義，発展的民主主義，新しい個人差心理学により促進された，人間についての個人主義的概念がやがて19世紀の教育界に支配的となった。ルッソーやペスタロッチーから出た自然主義の哲学が，アメリカの教育者たちに，各個人の能力を完全に発展させることへの関心を持たせるに至った。この考え方は，はじめ最も強く下位段階の学校に入り，それから徐々に上位学校に入るようになった。そして更に，個人を先づ重要なものと見，社会を単によく発達した個人の集合体とみる資本主義的個人主義によって支持された。この理想が個人差心理学によって一層支持されたとき，教育の主要目的は，子供を彼ら自身の要求，興味，能力に応じて発展させることであることが，多くの人によって当然のこととしてうけとられた。この考え方はまた，生徒たちが，彼等に最も価値ある教科を自由に選択する手段としての選択制度を合理化するのに役立ち，実用的職業的目的を強調し，知識訓練の理想に対立した。そしてやがて知識教科を軽視する傾向を生み，大学進学者以外の生徒たちの教育の指導原理となった。19世紀ではこの考え方は全般的に支配的とはいい難かったが，20世紀になるとその20年代頃まで教育理論に於ける支配的概念のひとつとなった。20世紀の30年代頃になると個人主義修正の線が出るのであるが，今次大戦の敗戦国に対するアメリカの教育管理政策には20年代までのロマンチックな教育思想が影響を及ぼしたの

であった。

良き道徳性や読み書き能力を伸ばそうとする目的はもとより基本的なものであったが，実用的社会的な個人的目的が19世紀を通じて勢力を増しつつあった。学校の秩序を保ち，不正に対する罰の手段としての身体訓練は勿論その役割を終え，ただ，凡ての他の手段が効果なきものと考えられたときにのみ，教師によって用いられ，効を奏することもあった。

19世紀中ヨーロッパから一連の影響がアメリカ教育に及んできた。英国からは日曜学校，幼児学校，助教学校の考え方が輸入された。これらの学校は，私立学校から公立学校体系への過渡の促進をしたのみならず，幼児学校は，学校が4歳から6歳にかけてはじまる幼児に対し，宗教的，道徳的，読み書き能力の，教育について責任をもつという考え方を普及した。助教学校は，学級教授が個人教授よりも良いし，少なくとも，道徳の，読み書きの，知識の，教育には有効であるという考え方をひろめるのに役立った。また助教学校は，賞や社会的罰による訓練は，体罰よりもより有効であるということを示した。

ドイツからはペスタロッチー，フレーベル，ヘルバルトの教育理念が輸入された。ペスタロッチーの考え方は，道徳的宗教的目的を強化したのみならず，読み書き教育の目的，社会的，実用的，個人的な教育目的にも刺戟を与えた。ペスタロッチーの教授方法がアメリカの教育実践に適用されたとき，3R教授の新しい方法があらわれ，一層多くの注意が自然や具体物に払われた。地理，図画，音楽，家政，産業技術の実際的有用性も承認された。教科の，厳重な論理的な組織よりは，むしろ心理的な組織が個人の学習要求に適合するために企てられた。熱心なよく訓練された教師の手によってこれらの新しい方法が学習の改善を促進した。が方法が形式化され体系化されるにつれて，知識をより有効に伝達する理想が支配的になった。

フレーベルの幼稚園は，道徳的宗教的，社会的，個人的な目的を強調した。フレーベルの弟子の一人であるクラウス（Johannes Kraus 彼は1850年代アメリカに居た）と，1856年にウィスコンシン州のウォータータウンにアメリカ最初の幼稚園をひらいたカール・シュルツ夫人（Mrs. Carl Schurz）の影響下に幼稚園の理念は急速にひろまった。ホレース・マン（Horace Mann 1796–1859）の妹のエリザベート・ピーボディ（Elizabeth Peabody 1804–1894）は1860年代にボストンに英語で教えられる幼稚園を開いた。因みにシュルツ夫人の幼稚園はドイツ語で教えられた。ウィリアム・T・ハリス（William T. Harris 1835–1909）はセントルイスの公立学校体系に幼稚園を加えた。1880年頃には幼稚園は30の州につくられ，1900年頃にはその数アメリカ中で4500園になった。その3分の2以上は私立であった。幼稚園が，遊び活動，運動の自生，協力の社会的態度などを通して，子供の個々の能力の発達を強調したことは小学校の固い訓練や形式的な雰囲気を救うのに役立った。マサチュセッツ州のクィンシーの教育長として，またシカゴのクック郡師範学校長として，フランシス・W・パーカー（Francis W. Parker）は1880年代と90年代の幼稚園運動の功労者である。

ヘルバルトの教育理論はペスタロッチのそれが19世紀のはじめであったのに対し，19世紀の終

りの20年間アメリカに大流行した。ヘルバルトの最初の影響は，社会科や文学の教育を通して教育の社会的目的を強調した。しかしヘルバルトの五段階教授法が体系的学課案に形式化されたとき，知識教育の目的が強く前面に出て，ヘルバルト的方法は主として教科の有効な習得方法として用いられた。ヘルバルト主義は，チャールズ・ド・ガーモ (Charles De Garmo 1849–1939)，チャールズ・A・マクマリー(Charles A. Mcmurray 1857–1929)，フランク・マクマリー(Frank McMurry 1862–1936) のような人たちの影響により，また1895年創立の全米ヘルバルト協会(the National Herbart Society これは後に the National Society for the Study of Education 略称 NSSE，ここから出ている年報はアメリカの教育の動向を最も地味にとらえるのに便宜である) の影響により，師範学校や教育大学に於て有力となった。日本の明治時代のヘルバルトブームも以上の傾向がアメリカ経由で伝ったのである。ペスタロッチーも亦同様にしてアメリカから日本に伝わった。

19世紀のアメリカの小学校のカリキュラム拡張の詳細をここにのべる余裕はないが，カリキュラムが拡張されたという事実は極めて重要なことである。カリキュラム発展の方法に見出されるいろいろな差異は大きいものであった。各都市や各州のさまざまな学校に共通な型はどれひとつとしてなかったからである。19世紀を経過する中に，老婦人経営の学校，学区学校，読み方学校，書き方学校などの３Ｒのやや狭い教科科目は，アカデミーや下級中学で教えられた教科目の多くをふくむまでに拡張された。

小学校カリキュラムに於て最初の重要なことは，一般民衆の読み書き能力の増進を目的とした英語の研究のことであった。いろいろな学校でこの研究にどんな名称が冠せられようと，その中には通例，読み・書き・綴り・文法修辞作文の諸規則がふくまれるのが共通であった。これらの科目について書物を書いた人々の中で最も影響の強かったのは，ノア・ウエブスター，リンドリー・マレー (Lindley Murray 1745–1826) W・H・マックガッフィー (William H. McGuffey 1800–1873) であった。ウエブスターの綴字書や文法や読本は最も人気があり，特に綴字書は19世紀の大部分を通じて最もよく使用された。それは愛国的国家主義の理想を表現し，読み書き教育の目的のみならず，新しい市民的社会的な教育目的をも表現していた。訓練的な読み書き能力の目的を表現するマクマレーの英語文法は，ラティン語文法に於て定義されたような，文法の長年にわたって公認された分類，即ち，文学論，活用，文章論，韻律学などに型どったものであった。マクガッフィーの学年別読本は生活を進める手段として，宗教的道徳心，愛国主義，慎重な実践道徳などの中産階級に支配的な諸徳を反映したものであった。宗教的，道徳的，読み書き的，社会的，実用的な諸目的は彼の６つの読本に於て至上のものであった。

彼の６つの読本は1830年代後にあらわれたものである。小学校に於ける次の最も影響力のあった教科は疑もなく算術で，これは主として訓練的実用的目的から発展した。はじめの間，算術教授の最も共通な処理方法は，教師が全部書くか，生徒に問題を書き取らせるかであったが，次に適当な規則を応用して問題を解くことにつとめ，続いて教師が答を訂正した。算術教授に重要な

躍進的な進歩がなされたのは，ウォレン・コルバーン（Warren Colburn 1793–1833）が1821年に彼の知的算術（Mental Arithmetic）を出版したときである。彼は教科の心理的帰納的組織のペスタロッチー的理想を採用した。19世紀のはじめ頃は算術はその有用性の故に人気を博したが，後半になると更に，その訓練的価値のために存在を正当化された。自然研究もペスタロッチーの客観的方法の結果として，小規模ながらいろいろな形であらわれるようになった。

次に重要なのは種々な社会研究で，主として地理とアメリカ史であった。アメリカ史の教科書は，国家主義の発生と，教育の市民的社会的目的とに応じて，19世紀の前半に多数あらわされた。社会的市民的関心は19世紀の30年代又は40年代に早くも政治，公民科，政治経済の研究に発展した。これは19世紀の後半に更に発展した。

アメリカの19世紀初期の支配的な政治経済の理想が学校カリキュラムに与えた最も典型的な影響のひとつは，政治経済学入門（First Lessons in Political Economy）と称する教科書がつくられたことである。これは1835年にコロンビア・カレッジの１人の教授がつくったもので，これには宗教的道徳的目的，実用的努力が第一にはっきりあらわされている。伝統的な自由放任の経済体制を讃美し，産業への政府の介入に反対し，自然法的経済を主張する，この教科書は，いうならば，アメリカの夢たる，個人主義的概念を謳歌するものであり，勤勉，節約，打算，決断，満足，感謝などが美徳とされたアメリカ経済に，20世紀の第二４半期のはじめに大恐慌があらわれるまでのアメリカ理想をもりこんでいるわけである。

要するに，19世紀のアメリカは浪漫的な個人主義の時代で，あくなき個人の自由が讃美された。戦後の日本にもちこまれたアメリカ自由主義はこの19世紀のものであった。1930年代のヨーロッパの全体主義的傾向の触媒作用を受けた後のアメリカ民主主義は，1945年の日本には危険と考えられたのかどうかは知らないが，戦後の日本の改革の原理は，19世紀の，すでに歴史的役割を終ったという方がいい位の古びた個人主義や自由主義が支配するものであった。相手の国の国民の心情の読み方の余り得意でないアメリカの対外心理の然らしむることかも知れないが，時代のずれたものを，20世紀後半の，すれた国民感情をもつものに与えた結果が，今日世界の方々にみられる反米感情のひとつの原因なのであろう。しかし，与えられる側に於ける，新興権力欲所有者には浪漫的個人主義は有り難いものである。現在の日本に於て，皮肉にも反米感情をもつ人たちの間に，自由主義の19世紀から20世紀への原理的展開が，保守反動と映るのもこの故である。浪漫的個人主義の裏はそのまま粗野な国家主義とつながったものであることを全く忘れて，浪漫的自由主義を進歩的なものと思い込んでいるところに，敗戦国家の文化人のお目出度さがあるようだ。

20世紀の小学校教育につき先づ英国から考えてみよう。英国の初等教育の主な特徴のひとつは，形式と維持機関に於てのみならず，カリキュラムに於ても変化がさまざまだということである。カリキュラム構成に於ける地方の自発性と自律性は20世紀になっても英国教育の特徴となるものだった。英国人はまた，家族及家庭が基本的な制度であること，学校は家庭が与えない訓練を与

える補助的制度であることを信ずる傾向があった。教育法ですらもが通例，親に対し，子供らを学校におくることの強調よりも，子供らが教育さるべきことを指令することの方が先に出されるという調子であった。このことは性格及道徳の訓練が先に立ち，教科の習得は従属的立場に立つことを意味した。更に教科そのものが1921年の教育法にあらわれているように，むしろ狭く解釈された。即ち，同法は親たちは子供が５歳から14歳まで読み・書き・算術の初歩的教授をうけるようにしなければならないと規定しているだけであった。

この３Ｒが凡ての英国の小学校に見出される唯一の教科であった。しかし各学校が，地理，歴史，自然研究，図画，音楽，体育衛生，手工及び家内技術のような科目の授業を与えることが適当と考えたときは，３Ｒ以外に，カリキュラムをひろげることが出来たし，またこれらの科目に与えられる時間の量も弾力的であった。国定教科書はなかった。教科書の内容に関しても何の規定もなされなかった。宗教教育は多くの小学校に於て重要な役割を演じた。子供たちが11歳になって中等学校に行くべきか，基礎的な知識の分科での附加的訓練をうけるため小学校の高等科にて更に教育をつづけるべきかどうかを決定するために，特定の試験が一般的に行われた。11歳試験（eleven plus examination）と云われるものがこれである。しかし小学校教育の範囲と概念の拡大は1944年の教育法に於て強調され，この法は，教育は児童や社会の道徳的・知的・身体的要求に適合すべきものなることを規定した。この法により英国の教育はその国民教育体系の近代化を完成したといえるであろう。

フランスの小学校に於ては国家主義的要素が常に，教授方法やカリキュラムの直接にして有力な部分であった。国家主義の線に沿って教科目を充分に修得するという理想が大きな役割を演じた。故に多くの強調が基礎的な技能，事実，組織づけられた知識などにおかれるようになった。教科書の種類と内容はフランス文部省によって厳格に規定され，口頭筆頭いづれもの国家試験が11歳と高等小学校の終りに凡ての子供に与えられた。道徳や公民の教授に加えて，カリキュラムは通常，３Ｒ，フランス史，地理，自然研究，図画，唱歌，手工及び家内技術，体育及び軍事訓練などをふくんでいた。教授の最も共通な方法は，教師による直接教示，質疑応答，書取を練習帳にうつさせる方法，うつされた教材の反復記憶などであった。

ナチスにより占領されていた当時，親独的な教科書を導入し，第一次世界大戦中のドイツの戦争責任又は残虐行為に言及したりなどして反独的であった教科書の一掃に非常な努力が払われた。第二次大戦後第四共和国の臨時政府の下で，アメリカの方向に則して初等教育を近代化しようと諸計劃がなされた。11歳の子供のいる200学級の約5000人の子供のための実験計劃が1945年の秋，個人化された活動計劃を強調するため導入された。この計劃が承認されたら小学校により広く拡大されることになっていた。が日本の如くヨーロッパではアメリカ風はそのまま発展しなかった。行政面に於ける若干の手直しはあるにせよ，ドゴール政権下の今日に至るも，フランス教育の特長は，その鮮やかな知識教育を軸枢とする教育体制である。日本の小学第６年，中学第１年に当るところに観察課程を置いて，ゆっくりと子供たちの能力を弁別して上位校への進学を定めるや

り方は，日本などでも大に参考とすべきだろう。共和国時代ドイツの多くの小学校教師は，帝政時代の学校の極度に統制された，権力的な，主知的な教科への反動として，抑圧と統一の教科からの個人の自由を強調した進歩的な教授方法に熱心であった。自由表現の手段として，地方の環境，旅行，遊び，言葉，美術などの研究が強調された。印刷された指導要領による強制でなく，奨励の形式がとられ，児童心理学，生徒の興味に注意が払われ，プロシヤの軍事訓練式のかがとをきちんと合せて敬礼する形式訓練の代りに，生徒と教師との関係をより快適なものにすることにも注意が払われた。しかしかかる自由と個人主義はもとより多くのドイツ人から嫌われた。そしてこうした活動方法の行きすぎが，反動的に，教師の厳重な統制・服従・訓練・権威への復帰をもたらし，ナチス時代になって，大きく振子が右に動くことが不可避にさえ見ゆるに至った。

ナチス政権下のカリキュラムの内容は全くナチスによって決定され，国家の過去，現在，未来を中心として形成された。歴史，特に神話的英雄，軍事業績をほめたたえるゲルマン民族史に関心が持たれた。新しい教科書の標題は例えば，「古代のもやの中に」，「北欧の英雄」，「ゲルマン人の戦い」，「犠牲と指導に於けるゲルマン人の偉大」などというものであった。国家の賞讃の行きすぎは外国語教育を軽視することをも招来した。ドイツ語，ドイツ文学，ドイツ文化，ドイツ芸術，ドイツ音楽などが強調された。正に万国に冠たるドイツであった。ナチスのいうドイツ的とはもちろんアーリア民族的，非ユダヤ民族的な意味で，このことは凡ての領域に於けるユダヤ人の広汎な貢献が除去さるべきことを意味した。地理はドイツを賞讃し，子供たちに国家の凡ての部分に一層の忠誠を捧げさせるために利用された。

国家の将来は，生物学，優生学，民族の純粋を保つための科学などの研究に託された。関心は健康，アーリア民族間の正しい結婚，国家のために子供を生み育てることにあった。ドイツの将来の役割りの経済的政治的研究が，ドイツの失われた植民地をとりかえし，ドイツ民族の血であるそれらを世界の各地から集めて，ひとつの偉大な祖国に統合し，世界の経済的政治的調整を支配し得るような時代の実現までにドイツを自己充足させる必然性を強調した。第二次世界大戦後国連による，ドイツの学校における，客観的知識や民主的教授法の如きもの一切の復活は，その様相に於て民主的であり，ナチスの神話のもっていたような，活潑さ，興味，魅力をもつ新しい教科書を編集著述するという大きな課題であることを意味した。が一方に於て，主として英米側の教育占領政策は失敗もした。そのひとつはギムナジウムの役割の過少評価と，レアール・シューレのそれの過大評価である。即ち，ギムナジウムを単なる体育場的意味に誤解し，ナチスの温床と見たこと，レアール・シューレをその名称の故にその近代的役割を買いかぶったことである。ナチスの温床はむしろレアール・シューレの側であったことを見抜く鋭さをアングロ・サクソン系の知性はもっていなかったようである。ギムナジウムはプロシヤの時代から実力あるものには平等に門戸が開かれていたのであった。また国民学校(Volksschule)を庶民学校(people's school)と誤解したことも，失敗のひとつである。制度がつくられて以来ドイツの国民教育体系は決して貴族のための系列と庶民のための系別とに分れていなかった。貴賤をとわず子供は国民学校に通

ったのである。むしろ英米人はこれを elementary school と訳して理解すべきであった。こうした皮相な感覚がドイツの側から憫笑されたのだった。それから教育哲学に於てもナチス体制まではドイツの方にすぐれたものが多かった。今世紀の20年代と30年代はじめまでのドイツの教育学の成果を今日ひもといてみれば，何人もアメリカの教育哲学など色あせたものであることを発見するだろう。事実勢いこんでドイツに乗りこんだアメリカ人教育部隊も，ドイツのかつての教育学の水準がわかるにつれ，教育理論についてはドイツの方が先輩だと気付いたのである。しかもそこには基礎知識訓練に鍛えられたドイツ国民の根性があった。

ロシアに於ける初等学校改善の最初の計劃に於て共産主義者は彼らが進歩的であると信じたものをとった。その方法として，諸活動，構案法，学生の自由，政治イデオロギーなどが，新しい政治の理想を新世代にふきこみ，教師を改宗させるために採用されたのであった。個々の能力別や競争は資本主義的イデオロギーの残存物として廃止され，集団協同活動に於て仕事を成就する能力が理想としてとり上げられた。しかし第１次５ヶ年計劃の後，共産主義者は，短い期間に高度に産業化された国家を建設する手段として，人民に，組織化された論理的な知識を与えるいっそう伝統的方法にかえることが安全であると感ずるに至った。そして教育体系の資源は徐々に知識の修得に向けられるに至った。1929年にはソ連の教師たちは，彼らの主要な仕事は第１次５ヶ年計劃の目標達成を助けることであるとのべていたが，1938年頃になると彼らの主要な責任は，ロシア語，数学，科学，技術学，地理歴史を修得するようなまじめな事柄に於て若いものを援助することであると認めるに至った。教科の教授が復活され，安定しかつ一般的に書かれた教科書が注意深く編集され，学問の緊密に組織された系列が各科目に於てつくられ，厳重な試験と成績評点が導入され，その固さ，きびしさ，普遍性に於てフランスのに似た体系的カリキュラムが一般に発展してきたのである。

下級学年での政治教育は廃止され，教師の完全な権威と訓練が再建された。良心的な活動，良き成績，試験に合格すること，まじめな勉強，教師に服従すること，個人的な容貌，態度や行為などへの生徒自身の責任が強調されることになった。共産主義国家や産業社会をつくる国家的目的が教育方法や内容に於ける新しい形式をとることになり，これらの目的は凡ての学校にしみこむようになった。小学校教育は決定的に国家の政治的分節であった。政治目的に統一せられるとはいえ，ソ連の教育は能力主義に立つ知識教育に一貫している。フルシチョフ改革以前の学制では，10ヶ年の一般普通教育（小学４年間をふくむ完全中等学校，これに対し地方では小学４年間をふくむ７年制の不完全中等学校もあった）を終了したとき，「成熟試験」を意味する最終試験を，ソ連の青年たちは主要科目――ロシア語，ロシア文学，外国語，代数，幾何，物理学，化学，歴史の各科目につき受け合格しなければならなかった。この最終試験の目的は，第10学年の生徒が得た知識の量を検証し，彼等の判断力の発展と独立，及び，知識を生活に或いは理論を実践に関連させる能力を調べるためであるが，この試験は必修であった。７年制学校の場合は第７年に試験がなされた。現在の11年制初等・中等教育制度でも，同じ趣旨のもとに，第８年又は第11年

に於て試験を受けることになっている。この試験如何によって，上級校への進学コースが定まるのである。因みにソ連の義務教育は8年で，最初の4年間が初等教育，あとの4年間が中等教育とされ，義務教育を終了すると更に3年制の中等学校に進学出来，11年間が一般普通教育の標準期間となっている。最近は学科の重複をさけることにより，初等段階を1年減らして10年間に短縮しようとする計画が表われ実施された。

学問的能力を検証する試験を必ず受けねばならないことは，ソ連の教育が，その基礎段階から，所謂アカデミックになされていることの例証となろう。これを偏知教育とか，強制教育とか云ってけなすことは学校教育の本質を解せざるものの云うことである。大衆教育に知性増強をはかる現代教育の極めてすぐれた一例を，私たちはソ連の教育に見なければならない。

以上各国の例に渡って，基礎知識教育のあらましを辿ってきたが，3R教育は知識教育の底辺として学校教育には絶対に不可欠のものなのである。これの完全消化を抜きにして，いかなる学校教育も成立し得まい。読み・書き・そろばんの教育は学校教育のいかなる分節にもくみこまれて居り，一切の知識体系の土台をなすものである。これを無視することは土台をはずすことであり，そこには体系の破壊があるだけである。3Rはその内容に於て初歩的なものであり，これを教えることは容易であるとの錯覚をひとに抱かしめ勝ちであることが，3Rを軽視せしめることにもなるのであるが，実際はなかなか骨の折れるものであり，生活適応とか社会学習とかいうものを口先きで教えることの方がはるかに易しいのである。要するにこれらのものは，情報が低度の手工技術を与えるにすぎないものであるが，読み・書き・そろばんにはじまる知識体系を子供たちに習得させるのには，教師も可成りの努力が必要であるし，子供たちも相当勉強することを要する。しかも学習の効果は即座にあらわれる。教師にしてみれば自分の努力の跡がまざまざと人前に曝されるわけである。要するにごまかしの利かない教科が外ならぬ読み・書き・そろばんなのである。従って怠けものにはうとんぜられることになる。優劣の差がはっきり分って子供たちにも恐れられ，自分の子の能力を差別的に示されては親の威厳にかかわるとでもいうのだろうか，知識教育軽視は親の利己主義にもかない，3Rは教育の王座からひきずりおろされ，興味本位のままごと遊びの場と教育の場が化するに至り，20世紀の人間の知的後退をあわや来さんとするかの状態に立ち至ったのであった。主として，この危険な現象は太平洋をかこむ国々に起ったのであるが，今世紀の後半に入ってこれらの国々も迷夢から醒めはじめた。アメリカ自体が小学校，中等学校のカリキュラム構成に専門各科の学者たちの意見を反映しはじめるようになり，教育学独裁の傾向を是正しようとする動きを見せはじめた。生徒たちにどんな教科がえらばれようとも，その基礎構造の理解を与えることは，知識を使用したり，教室の外で経験し後に教室内の訓練にくみいれる問題や出来事に知識を関係づけたりするための最少限度の要求であるとする考え方は，従来のアメリカの教育理論には珍らしかったことである。子供たちが自ら発見する操作過程の中で原理や概念や法則を理解させようとするやり方を打ち出したことはアメリカ教育もオーソドックスなものになったことを示すものといえるだろう。知識訓練から出発し知識でまとめ

るということが教育の原理となったことは，知識の底辺としての３Ｒの復権をも示すものである。

私たちの国に於ても読み・書き・そろばんから出発する知識教育を，学校教育の中核におくことに自信を持つべきであろう。結局学校教育では，いかなる原理方法がとられるにせよ，知識教育しかやれないのであるから，それなればはじめから，秩序立てて知識学習をなすべきである。道徳も情操も意志も健康も知識の底から出てくるものである。だのに基礎知識学習は機会学習でいいとして偶然の成行きにまかせ，やれ，道徳だ，情操だ，健康だ，社会性発達だ，全面性発達だなどと騒ぎたてるから，何をやっているのかさっぱり分らない学校が出来上るのである。教師の指導能力が端的に現われる３Ｒ教育を避けて，いい加減の舌三寸で効果の宣伝の出来る，全面性発達の教育などを現代教育の粋として宣伝するとすれば，その狡猾さは極まれりというべきであろう。効果のあらわれぬものを故意に強調して外面の華やかさの中に仕事を偽装するが如きは，教育を冒瀆するも甚しきものである。鉄は赤き間に打つべしとか云われるが，人間も亦，小さい時から知性を鍛練されなければ，自分の眼で見，耳でたしかめ，頭で創造的に活動し得る人間には成熟することが出来ない。学校教育発達の歴史は３Ｒにいかなる教科が加えられるかということの歴史である。その上につけ加えられる教科が多くなればなるほど，土台の３Ｒ教育はますます固く人間の心に打ち込まれなければならないのだ。それだのに，いろいろ教科がつみ重なれば，重なるだけ，３Ｒの姿が消えて無くなろうとするような，教育内容構成は，ただ新奇を狙うだけのことで，1960年代以降の知識量の尨大な世界に挑む人間を育成する真実の教育とは決してなり得ないであろう。

備考註――本節に於ける３Ｒ教育の史的経過については，Freeman Butts の A Cultural History of Education 1947 の第12章以下を参考例とした。